

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

博士論文審査報告書

論 文 題 目

原題名 Original Title	INTRASTATE CENTER-PERIPHERY RELATIONS: U.S.-GUAM AND DENMARK-GREENLAND ISLAND-CONTINENT AFFAIRS
英訳 In Japanese	国内における中心・周辺関係の考察：アメリカ・グアムおよびデンマーク・グリーンランド、島嶼部・大陸部をめぐる問題

申 請 者

氏 名 Name	姓 Last Name	Middle Name	名 First Name
	LIU	Sakurai	Tatsuya
学籍番号 Student ID	4013S312		

2020年 1月

1. 本論文の主旨

本論文における問題意識は、ひとつの主権国家内にありながら、ある周辺地域の島嶼部が中央政府によって特別な制度的地位を与えられ、中央政府に対して一定のパワーを有しているという現象に起因する。本論文では、そのような一国の政府と特定の周辺地域の関係を Center-Periphery Relations と提示し、このような Center-Periphery はどのような特性を有した上で中央政府に対してパワーを行使できるのかについて、分析枠組を提示することを目的とする。さらに research question は、この分析枠組を形成する要因 (dimension) として “History, Culture, Governance, Natural Resources and Industries, Defense-Security,” という五つの類型があり、そのなかでは Security が重要ではないかという問題を提起する。具体的検証の事例としては、Denmark-Greenland, the U.S.-Guam の二つの事例を検討しとりあげ、さらにその比較を行う。

2. 本論文の構成と概要

本論文の構成

Introduction

1. Literature Review and Insights from Inter-State Center Periphery Relations

- 1.1 Wallerstein, Escude, and O' Tuathail
- 1.2 Michael Hechter's Work
- 1.3 Notions of Geography, Power, and Security
- 1.4 Incorporating Hierarchy into Center-Periphery Analysis
- 1.5 Case Selection and Research Design
- 1.6 Research Approach and Methodology

2. The 'Peripheral' Relationship' and the Analytical Framework

- 2.1 Defining Terms.
- 2.2 The Peripheral Relationship and Analytical Framework
- 2.3 Explaining Dimensions – Significance and Meaning
- 2.4 The Nature of Peripheral Relations - Purpose and Framework Rationale.
- 2.5 Analytical Framework for the Nature of CP-Relations
- 2.6 Understanding Center Periphery Power through Framework Dimensions
- 2.7 Summary

3. Arctic Affairs Greenland

- 3.1 The 'Peripheral' Relationship - Overview
- 3.2 Center-Periphery Relations
 - 3.2.1 *History.*
 - 3.2.2 *Culture*
 - 3.2.3 *Governance.*
 - 3.2.4 *Natural Resources and Industries*
 - 3.2.5 *Defense-Security*
- 3.3 Political Status: Greenland
- 3.4 Center's Perspective: Copenhagen
- 3.5 Periphery's Perspective: Greenland

3.6 Summary

4. Asia-Pacific Affairs - Guam (Guahan).

4.1 The 'Peripheral' Relationship - Overview

4.2 Guam's (Guahan) Center-Periphery Relations

4.2.1 *History.*

4.2.2 *Culture*

4.2.3 *Governance.*

4.2.4 *Natural Resources and Industry*

4.2.5 *Defense-Security*

4.3 Political Status: Guam

4.4 Center's Perspective: Washington

4.5 Periphery's Perspective: Guam

4.6 Summary.

Conclusion

章ごとの要約

序論 本論文における問題意識が昨今の状況をもとに提示される。ひとつの主権国家内にありながら、ある周辺地域に制度的(国内法によって)に特別な地位を与えていることが実際の状況として提示される。本論文では、このような関係を Center-Periphery Relations と提示し、このような Center-Periphery Relations の実例として、Denmark-Greenland, the U.S-Guan 関係をあげる。そしてその周辺地域が国内において特別な地位を有する状況を解明する分析枠組の提示が本論文の目的である提示し、さらに research questions として、この関係性は5つの要因からなるのではないか、その中でも security が最も重要なのではないかという問題を提起する。また、実証分析に関する sub question として、二つの事例の比較検討が提起されている。

第1章 先行文献を検討後、本論文の research design、二つの事例を選択したことの説明、および分析枠組が試論的に提示される。先行文献においては、国際関係における center-periphery についての主たる文献に触れたのち、Anthony Lake の議論を主たる論拠とし、国内における階層性(hierarchy)が持つ問題性を議論する。さらに事例として、Denmark-Greenland, the U.S-Guan 関係を検討することの論拠は、地理的に二つの地域が異なりつつも、周辺島嶼部として中央政府から特別な地位を与えられている共通性であると述べられる。さらに、この二つの事例を分析する上での conceptual analytical framework として "history, culture, governance, natural resources and industries, security" という5つの要因があり得ることを示唆し、その概念型を示す。

第2章では、第1章で示された分析枠組について概念的検討を試みる。この論文の分析概念である center, periphery, peripheral relationship, power といった概念について自らの定義を試み、なぜ center-periphery relations を検討する分析枠組が必要なのか、なぜその分析枠組は包括的な概念ではなく、いくつかの要因を検討することが必要なのか論述する。さらに、この分析枠組を構成する前述の5つの要因について個別に説明し検討する。

第3章では、Denmark-Greenland における Center-Periphery relations を分析する。Denmark-Greenland 関係の特性を、History, Culture, Governance, Natural Resources and Industries, Securityという要因から検証し、Denmark 政府、およびGreenland 自体がどのような意識を有しているのか(Intent and Purpose)をそれぞれ叙述し、この章の総括では、

Denmark と Greenland は友好的関係を有しており、Greenland にとっては資源管理が Center に対する有効な要因となっているが、他方、Denmark にとっては security についての関心が高いとしている。

第4章では the U.S.-Guam 関係における Center-Periphery Relations を分析する。U.S.-Guam 関係の特性を、History, Culture, Governance, Natural Resources and Industries, Security という類型から検証する。さらに US Government、および Guam 自体がどのような意識を有しているのを叙述する。また、この章では、著者自身がグアムでおこなったインタビュー(ex. Speaker of the Guam Legislature, former U.S. Congressman, Attorney General of Guam)が含まれている。総括としては、the U.S.-Guam 関係には植民地的性格が見られるとしている。

結論では、序章で試論的に提示した概念的な分析枠組を構成する五つの要因の中では、security の要因が最も際立っていると論じる。また the U.S.-Guam 関係と Denmark-Greenland 関係を比較するならば、Greenland は歳入源を占める natural resources の点で、Center に対するパワーを相対的に行使し得ると論じている。

3. 口述試験での質疑応答

本論文審査委員会は、申請者から提出された学位請求論文を査読し、2019年11月25日に2時間余にわたり口述試験を実施した。主たる論点は以下の通りである。

- Research questions が依然として明確でない。自己の研究が何を検討するのか、何を明らかにするのかを明確に提示するべきである。またその方法論についても、より丹念な説明が必要である。種々の分析概念、たとえば4つのシナリオという概念が用いられているが、これが分析枠組みなのか、明確に示されていない。何を目的とし、どのような research questions が提起され、それにどのように答えるのか、論文全体の骨幹をわかりやすい形で示すべきである。種々のレベルの錯綜する概念型が見られるので、それを整理して simplify した方がよい。不要な概念(scenario) や5つの要因の関係性を示す図表は削除すべきである。

- 全体の文章・文体を再考すべきである。自己の文体をもう一度見直し、学術論文(scholarly writing)にふさわしい文体とすべきである。

- 先行研究について、特定の国際関係論における研究者について、Big Three と表現して論じているが、その3名が Big Three であることに学界は同意しているとは思われない。Anthony Lake の先行研究が自己の研究の指針として重要とはいえ、Lake についての言及は長すぎるものであり、自らが重要と思う点だけをまとめて論じるべきである。

- the U.S.-Guam. Denmark-Greenland の事例分析の章においては、その情報を裏付ける脚注資料がより豊富になったとはいえ、さらに脚注部分をより実質的に確かなものにするのが求められる。実証部分においては、その情報及び内容の典拠を示す脚注がまだ十分とはいえない。

- 結論が、疑問形で終わっている。また、結論が序論での問いに答える形になっていないので、結論部分で何が明らかになったかについて、書き直しが必要である。実証研究において明らかになったことを踏まえ、改めて自己の分析枠組の妥当性あるいはその非妥当性に言及すべきである。

口述試験では、指摘や質問に関して回答が示され、修正すべき点については、最終提出までに適切に修正することが具体的に明示され求められた。審査委員会は修正意見に対する対応表とともに、最終提出項に適切に修正がなされていることを確認した。

4. 評価と審査結果

1. ひとつの国家内、中央政府管轄内において、地方は同等の関係を中央政府に対して通常は有する。しかしながら、中央政府がある一定の地域、特に周辺 *periphery* に存在する島嶼部に対して制度的な裏付けを有した上で特別な関係を保持する場合があります。本論文は、この現象に着目し、*Denmark-Greenland* および *the U.S-Guam* の関係性を探求するものである。この特定の島嶼部とそのそれぞれの中央政府との関係が問題性をはらむことに着目した点は評価できる。

2. 本論文の問題提起として、そのような特別な地位を制度的 (*ex. The Organic Act*) に与えられた島嶼部が、いかなる要因 (*dimension*) を有することで、中央政府に対してパワーを行使することができるのかという問題提起をおこなう。さらに、その要因として、*history, culture, governance, resources, security* という5つの要因を自ら導き出し、その要因の作用と結果によって中央に対応するパワー関係が変わり得るという分析枠組みを自ら提示したことは評価できる。またこの分析枠組を応用し、*the U.S.-Puerto Rico* の関係性をも、考察することができるという発展性を含んでいる。

3. 上記2の分析枠組みを検討し、二つの事例研究を通して、5つの要因のうちで *security* 要因が他の要因よりも重要であるということを論じたことは、さらに緻密な分析が必要であり、他の要因を相対化してしまう懸念があるが、学術的貢献として評価が認められる。

4. *Denmark-Greenland* 関係と *the U.S-Guam* 関係を比較検討し、この二つの関係性においては、アメリカのグアムに対する関係の方がより「植民地的 (*colonial*)」であるという分析を行っている。この二つの関係性に着目し、その内的動因を分析した上で、一見すると地域的に異なる二つの関係性の比較をし、同質性および異質な点を論じたことは評価できる。

5. 以上のように、これまで国際関係論で論じられなかった島嶼部の問題性を議論する分析枠組を提示し二つの事例を検討したことが評価できる一方で、諸概念とその関係性をより精緻化すること、先行研究の整理にもう少し工夫が必要であること、また論文に対する自己の立ち位置が主観性を有するもの (*ex. normative/ critical studies*) なのか、あるいは厳格に客観性を下敷きして追求するものなのかを明らかにした方がよいといった問題が残されている。

口述試験の内容を踏まえ、論文に関して慎重かつ総合的に審査を行なった結果、博士學位請求論文としての水準を満たしていると判断し、これを合格とすることに全委員が合意した

申請者名: Tatsuya S. LIU

博士論文審査委員会

主査 Chief Examiner: 篠原初枝

氏名 Name: 篠原初枝 (Signature)

所属 Affiliation: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

職位 Title: 教授

学位 Degree: Ph.D. 取得大学 Conferred by: The University of Chicago

専門分野 Specialty: 国際関係論・国際関係史

副査 Head Deputy Examiner:

氏名 Name: 植木千可子 (Signature)

所属 Affiliation: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

職位 Title: 教授

学位 Degree: Ph.D. 取得大学 Conferred by: Massachusetts Institute of Technology

専門分野 Specialty: 政治学・国際関係論・安全保障論

副査 Deputy Examiner:

氏名 Name: David Leheny (Signature)

所属 Affiliation: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

職位 Title: 教授

学位 Degree: Ph.D. 取得大学 Conferred by: Cornell University

専門分野 Specialty: 日本政治・東アジア安全保障論

副査 Deputy Examiner:

氏名 Name: 本多美樹 (Signature)

所属 Affiliation: 法政大学法学部

職位 Title: 教授

学位 Degree: 学術博士 取得大学 Conferred by: 早稲田大学

専門分野 Specialty: 国際関係論

2020 年 1 月 20 日